

通級による指導の充実に関する研究

－ 子どもに関わる教師をつなぐ定期的な情報交換会を通して －

扶桑町立山名小学校 滝 茂己

1 実践

(1) 年間スケジュールについて

通級による指導を受けている児童に限らず、特別支援教育校内委員会の目的は、効果的な指導や対応に向けて、児童の課題を学校全体で情報共有し、全校的な支援体制を整備することである。その中で、通級による指導の目標や指導内容、手だて等に絞って検討する情報交換会は、特別支援教育校内委員会と関連付け、それぞれの会と差別化し、目的の明確化を図ることで、より効果的な会となることを目指した。また、年2回実施している保護者会(7月・12月)の前に情報交換会を行うことで、本人の現状を考慮した通級による指導の内容を保護者に伝え、保護者の考えを聞き、よりよい通級による指導に向けた合意形成を図ることができると考える。そのため、第1回情報交換会を6月、第2回情報交換会を11月、第3回情報交換会は、次年度への引き継ぎ内容を保護者と確認する前の時期(1月下旬)が適切であると考え、実施した。通級による指導担当者が参加できるよう、通級による指導担当者が本校に巡回している火～木曜日に計画し、年間スケジュールをまとめた(資料1)。

【資料1 通級に関する年間スケジュール(令和4年度)】

- ① 4月14日(木) 第1回特別支援教育校内委員会
 - ・前年度の合理的配慮(手だて)の引き継ぎ内容の確認及び、現在の児童の実態を共有する。
- ② 4月下旬～5月上旬 保護者に連絡した後、通級による指導を始める。
 - ・保護者に連絡する前に、通級指導教室の担当者と通常の学級担任・特別支援教育コーディネーターで目標の設定と具体的な手だてについて話し合う。
 - ・個別の教育支援計画(本人・保護者のニーズや通級による指導の内容を含む)を合意形成する。
- ③ 6月21日(火) 第1回情報交換会
 - ・6月までの通級による指導内容や具体的な手だてを見直し、改善する。
- ④ 6月30日(木) 第2回特別支援教育校内委員会
 - ・通級による指導で見直し、改善した内容を全教師で共通理解する。
 - ・新規に通級による指導を希望している児童の実態を全教師で共有する。
- ⑤ 7月12日(火)～14日(木) 保護者会
 - ・通級による指導において見直し、改善した内容を保護者に提案し、合意形成する。
 - ・新規に通級による指導を希望している児童・保護者のニーズを把握する。
- ⑥ 10月27日(木) 第3回特別支援教育校内委員会
 - ・児童の実態に変容があったかを確認し、通級による指導の内容を継続するか、見直して改善するかを検討する。
- ⑦ 11月17日(木) 第2回情報交換会
 - ・通級による指導で見直し、改善する内容を確認し、具体的な手だてについて検討する。
- ⑧ 12月13日(火)～15日(木) 保護者会
 - ・通級による指導で見直し、改善した内容を保護者に提案し、合意形成する。
- ⑨ 1月下旬 第3回情報交換会
 - ・次年度に引き継ぐとよい通級による指導の内容や具体的な手だてについて検討する。
- ⑩ 2月9日(木) 第4回特別支援教育校内委員会
 - ・次年度に引き継ぐとよい通級による指導の内容や具体的な手だてについて共通理解する。
- ⑪ 2月中旬～下旬 保護者に連絡し、引き継ぎ内容を合意形成する。
 - ・合意形成した後、個別の教育支援計画や連絡票をまとめる。

(2) 情報交換マニュアル（連絡票）の活用と工夫

モデル案を基に情報交換会での話し合いに必要な情報を1枚のシートにまとめた連絡票（資料2）を作成した。連絡票の項目の中には、個別の指導計画や特別支援教育校内委員会等の資料と重なる内容が多いため、それぞれの資料から必要な情報を引用できるように、年間スケジュールと連絡票の入力時期を関連付けた。また、「通常の学級における配慮及び変容」の項目を4～6月、7～10月、11～1月の3つに分け、それぞれの情報交換会のときに児童の変容を把握しやすくすることで、情報交換会がスムーズに進行できるようにした。

【資料2 山名小学校版の連絡票 ※吹き出しは入力時期や他の関連を示したもの】

連絡票		
対象児童生徒のニーズ（目標としていること、困っていること）	年度当初に通級担当との面談によって児童が書いた目標を参考	
保護者のニーズ（目標としていること、困っていること）	通級指導開始前に保護者と連絡し、確認した内容を参考	
対象児童生徒が困っていることの背景として考えられること	150文字以内	第1回特別支援教育校内委員会の資料を参考
通常の学級での目標	※80文字以内	個別の指導計画の目標と願いを参考
通常の学級における配慮事項（合理的配慮）	個別の指導計画の具体的支援の中で学級担任が支援する内容を参考	
通級による指導での重点目標	150文字以内	
手だて	児童生徒の様子（目標達成度）	黄色の項目は第1回情報交換会までに入力する。
	5 4 3 2 1	
	5 4 3 2 1	第2回特別支援教育校内委員会の参考資料にする。
通常の学級における配慮及び変容（4～6月）	150文字以内	
通級による指導 指導内容（9～3月）	手だて	児童生徒の様子（目標達成度）
		5 4 3 2 1
		5 4 3 2 1
通常の学級における配慮及び変容（7～10月）	150文字以内	水色の項目は第3回情報交換会までに入力する。
		第3回特別支援教育校内委員会から転記する。
通常の学級における配慮及び変容（11～1月）		第4回特別支援教育校内委員会の参考資料にする。
通常の学級における変容（1～3月）及び次年度への引き継ぎ		紫色の項目は保護者と個別の教育支援計画の引き継ぎ内容を確認した後、同じ内容を入力する。

(3) 情報交換会の様子

ア 第1回情報交換会

(7) 実施方法

4月中旬に行われた第1回特別支援教育校内委員会にて、児童の実態と昨年度の個別の教育支援計画の引き継ぎ内容を確認した後、通級による指導担当者と通常の学級担任が、目標の設定と具体的な手だてについて打ち合わせをし、保護者の了解を得て今年度の通級による指導を始めている。そのため、第1回情報交換会（6月）は、保護者会（7月）に向けて、通級による指導での内容が児童の実態に合っているか検討し、目標の設定や指導内容における具体的な手だてに改善する点はないか話し合うことを目的とした。参加者は本校の関係者（特別支援教育コーディネーター・通級による指導担当者・通常の学級担任）及び特別支援学校の教師で実施した。6月の時点で、通級による指導を受けている児童は5名であったが、情報交換会の参加者が児童の実態を共有することに時間をかけたいと考えたため、対象児童を2名にしぼって協議時間の設定をした。

(イ) 工夫したこと

連絡票を作成するための時間を短縮するため、他の資料（個別の教育支援計画・個別の指導計画等）のデータから必要な情報を引用する際、自動で転記するシステムを構築した（資料2）。

(ウ) 情報交換会を終えて

対象児童2名に対し、困り感をもっているさまざまな内容に対する手だてを一つずつ検討した。一人の検討にかかった時間が設定（30分）よりも長くなったことで、通常の学級担任から「情報交換会に対する負担感が生じるのではないか」という意見があった。今後も持続可能な取組にしていくためには、短時間で効果的な検討が行える情報交換会にするべきであると考えた。そこで、後日に実施した残り3名の情報交換については、参加者へ資料を事前に配付し、具体的な手だての検討を中心に進めたところ、情報共有の時間が短縮でき、児童一人につき15分程度で終わることができた。

イ 第2回情報交換会

(7) 実施方法

第2回情報交換会は、保護者会（12月）に向けて、実践している通級による指導の内容や具体的な手だてを見直し、改善することを目的とした。年度途中で、通級による指導担当者が代わったこともあり、新しい担当者による通級による指導が、ある程度軌道に乗る時期を考慮して11月に実施した。7月下旬より通級による指導を受けている児童が2名、体験中の児童が3名増え、計10名になった。そのため、情報交換会で話し合う観点を児童ごとにあらかじめ決めておくことで、更に効率よく情報交換会を実施できるようにした。また、第3回特別支援教育校内委員会（10月）において、支援を必要とする児童が以前と比べどのように変容したかについて、情報共有ができていた。そこで、通級による指導を継続して受けている児童については、連絡票を基に、通級による指導の内容や具体的な手だてが適切であるかを特別支援学校の指導・助言を得ながら確認する場とした。年度途中から通級指導教室に入級した児童については、第1回情報交換会の目的と同様に、児童の実態を共有し、目標設定と指導内容における具体的な手だてについて検討することにした。また、体験中の児童に対しては児童の実態や本人・保護者のニーズを受け、通級による指導と通常の学級の目標をそれぞれ決めることにした。どのケースにおいても、特別支援教育校内委員会で情報共有された内容は簡潔に確認し、関係する教師間での話し合い及び特別支援学校による指導・助言で一人10分の設定にした。

(イ) 工夫したこと

児童の様子が以前と比べどのように変容したかについて連絡票を基に再確認するのみとした。そし

て、ふだんの情報交換や連絡票の内容から考えられる必要な通級指導教室での指導内容や具体的な手だて等、特別支援教育コーディネーターが検討内容を絞り込むことで情報交換会の時間を短縮した。

(ウ) 情報交換会を終えて

検討内容を絞り込んだこともあり、効率よく情報交換会が進み、検討する議題に沿った内容で話し合うことができた。また、どのケースにおいても検討する時間が10～15分程度になったことは、情報交換会に対する負担感を減らすことにつながった。この会を持続可能な取組にする上で、情報交換会自体の運営の仕方が改善されたと考える。しかし、資料を直前に配付したため、話し合う議題をその場で提案・検討することになってしまった。より充実した話し合いにするために、議題内容を含めた資料を事前に配付する必要がある。

ウ 第3回情報交換会

(7) 実施方法

第3回情報交換会は、実践している通級による指導の内容や具体的な手だてを踏まえ、次年度へ引き継ぐ内容について検討することを目的とした。情報交換会で検討したことを第4回特別支援教育校内委員会（2月）において、全教師で共通理解を図った。

(イ) 工夫したこと

特別支援教育コーディネーターが引き継ぎ内容の中で検討したい議題を事前に連絡票で提示することで、情報交換会の参加者が検討したい議題に対して、自分の考えをもって話し合えるようにした（資料3）。また、通常の学級の目標と通級による指導の目標が関連しているか、また、児童の抱えている課題に対して妥当であるか再確認することとした。

【資料3 連絡票の余白に書かれた議題】

<議題>

- ・タブレットのカメラアプリを活用し、板書する内容を手元に置くことは効果的なので継続でよいか？
- ・家と学校の様子が違う児童に対する手だてをどうするか？
- ・同時処理優位の児童を生かすためにはどうしたらよいか？

(ウ) 情報交換会を終えて

検討したい議題を事前に提示したことで、それぞれの教師が意見や考えを前もって準備することができたため、意見交流が盛んになった。また、通常の学級の目標と通級による指導内容が関連しているか確認したところ、課題に対する目標や内容、手だてにそごがあるケースがあったため、来年度に向けて、どの内容に優先して取り組むべきかについて確認することにした。しかし、連絡票のそれぞれの項目の記載内容が多く、児童の実態に関する情報が膨れ上がってしまったため、連絡票の項目に記載する内容を精選し、情報を整理する必要性が出てきた。

エ 令和4年度 第1回情報交換会

(7) 実施方法

情報交換会の目的や実施時期については、昨年度と変わらないが、これまで行ってきた情報交換会だけではなく、特別支援学校の教師が参加しやすくするため、ウェブ会議を活用することにした。時間内に終えられないケースや担任の都合がつかないケースについて、後日、本校の関係者（特別支援教育コーディネーター・通級による指導担当者・通常の学級担任）のみで情報交換会を実施した。その後ウェブ会議で特別支援コーディネーターが特別支援学校の指導・助言を受け、その内容を通級による指導担当者と通常の学級担任に伝えるという形にも取り組むことにした。

(イ) 工夫したこと

通級指導教室に通っている児童は、昨年度以前から継続している児童がほとんどであるため、連絡票は昨年度から引き継いだ内容を基にして作成した。ただし、それぞれの項目に記載する内容を重点

二つまでに精選し、それぞれの目標や指導内容・具体的な手だてについて、関連付けられているかを確認しながら記載することで、必要な情報を絞り込むことができるようにした。

(ウ) 情報交換会を終えて

検討する内容を二つまでとしたことで、要点を絞って情報交換会を進めることができた。特に、通級による指導内容を通常の学級での学習や生活にどのようにつなげていくかということ踏まえて、目標や指導内容・具体的な手だて、通常の学級での配慮事項について検討することで、情報交換会の質が高まった。また、ウェブ会議の活用により、日程調整がしやすくなり、必要なときに必要なやりとりができる持続可能な情報交換会となると考える。

(4) 特別支援学校との連携

これまで、通級による指導を受けている児童の支援内容や手だての検討は、直接支援に関わる教師が行ってきたが、特別支援学校の教師の助言を受けながら情報交換会を行うことで、より効果的な支援を検討できると考えた。そこで、情報交換会の前に、連絡票の内容や話し合いの議題を伝えたり、対象児童の様子を授業参観してもらったりした。児童の実態を実際に見てもらうことで、具体的な指導・助言を受けることができ、これからの指導・支援の参考にすることができた。それを基に、具体的な手だてについて見直し、改善したことは共通理解が図れるように、連絡票に赤字で加筆・修正した。また、ウェブ会議による情報交換会では、特別支援教育コーディネーターが情報交換会の内容を伝えることから始めた。特別支援学校の教師の助言として「各教師の主観的な想いを特別支援教育コーディネーターが客観的な事実として整理する過程があったため、児童の全体像が見えてよかった」という意見があった。しかし、「ウェブ会議を実施するためには、特別支援教育コーディネーターのスキルや経験が少なからず必要である」との意見があった。昨年度、情報交換会を積み重ねてきた実績があったことによって実践できたことであり、まず、情報交換会の運営を滞りなく進める力量が必要不可欠であると再認識した。また、ウェブ会議の前に本校の教師間で情報交換会を実施するときに

【資料4 Q & A形式の指導・助言集】

相談事項もその他の質問も記入される事項	助言
Q1. A/D/H/D (授業活動補助)	<p>・「中法書」「書写帳」「多動性」が具体的な特徴。 発達に遅延のあるA/D/H/Dの4分の3は通級していきという。4分の1はその特性が強いと思われる(A/D/H/D)。A/D/H/Dに限らず、発達遅延がきっかけで英語の理解が得られず、発音に遅延せずに二次障害を起す場合があるため、気を付ける必要がある。 発達障害→個別学習指導(30-40%)が有効(→空想を伴うが)→低社会性人格者。 これをD/H/D/サードといひ、D/H/D/サード(学習的行動遅延)の修正は教育の役割。二次障害を助成が必要。そのために、 ①発達障害への理解と対応、②臨床的アプローチ、③自己評価を促すA/D/H/D(幼児は言葉の、言葉は認める、言語は発見づける)が大抵。 その子の特性を基として、その子の発達段階を基に教育をしてほしい。</p> <p>■個別：＜英語のキーワード＞A/D/H/Dのある子どもへの基本的対応。 ・「読解力(理解)と発音のバランス」が大抵。(時間と理解の両方) ・授業で分かっていないシステム作り/既定文章/読解の少ない場面/具体的な発音/スキームマップ/紙の表紙を写し合図をつける/「目より耳」の音読/スケジュールの明確化/「サーボ」の範囲(OK/クンは得られない、手短かすぎないことが大抵。) /無難に発達段階の成長を要しない。</p>

2 実践の成果

(1) 児童の変容

ア 通常の学級担任と通級による指導担当者の連携による成果

児童Aは、表記の間違ひが多いことに課題があった。そこで、通級による指導で表記の間違ひを減らすためのトレーニングを行うとともに、家庭にも同様の練習プリントを配付し、協力を依頼した。また、通常の学級担任がふだんのノートやプリントにおける文章表現で誤った箇所を丸を付け、正しい表記になるように直した。その結果、通常の学級で文章表現をする際に正しい表記で書けることが増え、少しずつ改善が見られるようになった。これは、情報交換会や連絡票を活用して、通級による指導で学んだことを通常の学級の学習や生活につなげるという意識をもって連携した成果だと考える。

イ 支援内容や目標設定を見直したことによる成果

児童Bは、集中力を持続することが難しいことが課題である。第3回情報交換会で検討した指導・支援を行っていたが、児童に変容がほとんど見られなかったため、令和4年度第1回情報交換会で再検討を行った。その中で、個別の指導計画で設定した目標が、児童の実態に対して高すぎるのではないかと助言を受け、目標設定を見直した。その後再び児童Bの様子を見ると、ふだんより長く集中する姿が見られた。情報交換会を通して、今の児童の実態に合った達成可能な目標であるかを見直したことによる成果だと考えている。

ウ 特別支援教育校内委員会で検討した支援内容を共有したことによる成果

支援内容や具体的な手だてが効果的であったときは、特別支援教育校内委員会の場で情報共有することにした。児童Cは、自分が納得した方法で取り組みたいというこだわりが強く、課題の取組に時間が多くかかることが課題となっていた。児童Cの担任は、特別支援教育校内委員会によって情報共有した別の児童の支援内容を参考にし、課題の量を減らした。その結果、児童Cは課題に丁寧に取り組むことができるようになった。児童Cの課題に対する負担感が減ることによって、意欲的に取り組むことができたと考える。このように、情報交換会で検討した支援内容を特別支援教育校内委員会で情報共有する校内体制をつくったことによって、学校全体の支援力を高めることにつながったと考える。

(2) 各立場から

ア 通常の学級担任

通常の学級担任から「ふだんできていなかったことを再認識したり、今の段階に必要な手だてが検討することができたりしてよかった」という声があった。通級による指導の目標や内容、具体的な手だて、通常の学級での配慮事項について、関係する教師間で改めて検討する機会があることのよさを実感できたと考えられる。また、通級による指導で児童に変容があったときは、指導が終わった直後に情報交換する様子が見られ、通常の学級の学習や生活につなげるという意識が高まってきていることを感じる。一方で、「指導方法の手がかりについて学ぶことが多く、参考になったため、今後も継続的に専門的な指導・助言をいただく機会がほしい」という声があり、専門的な知識をもった特別支援学校からの助言は、通級による指導や通常の学級での支援内容を具体的に改善することができる心強い存在であったことが分かる。

イ 通級による指導担当者

通級による指導担当者から「情報交換会は、これまでの指導内容が児童にとって有効であったか振り返る機会になるのでよい」「指導内容や手だてが、今の児童の実態に合っているか継続的に検討することができるので指導に一貫性があったととてもよい」という声があった。連絡票を活用した情報交換会に継続して取り組むことで、児童の課題に対する目標や指導内容、具体的な手だてのPDCAサイクルを効果的に回すことにつながったと考える。

ウ 特別支援教育コーディネーター

研究を始めた当初は、自立活動について十分に理解していなかったり、特別支援教育校内委員会との位置付けが混在してしまったりする等、通級による指導に対する必要な知識が十分でなかった。また、情報交換会を設定することに精一杯で、通級による指導担当者と通常の学級担任を「つなぐ」という特別支援教育コーディネーターとしての役割を果たすまでに至っていなかった。しかし、特別支援教育校内委員会と関連付け、情報交換会と差別化し、それぞれの目的の明確化を図ったことで、児童の実態を共有するだけでなく、支援内容や手だてを含めて共有する等、特別支援教育校内委員会

の在り方に変化が見られ、教師の力量アップにつながったと感じる。また、情報交換会の設定だけではなく、自立活動について学びながら情報交換会を実施することで、通級での目標と指導内容等を関係教師間で理解の共有をすることが重要であることに気付くようになった。このように、校内体制を整えたり情報交換会を実施したりすることを通して、特別支援教育コーディネーターとしての役割を少しずつ担うことができるようになってきた。とりわけ、連絡調整役としての役割は重要で、大変奥深い。「構音練習について、聾学校の先生に伺うと、より専門的な知識や実践を聞くことができるのではないかと」等、支援内容によってさまざまな障害種の特別支援学校の先生と連携をもつことができれば、通級による指導が充実したものになり、通常学級の学習や生活にさらにつなげることができるのではないかと考える。今後、校内の連絡・調整役だけではなく、児童の実態に応じた関係機関との連携を推進していきたい。

(3) 校内体制づくり

他校通級を行っている学校は連携を取る時間がつくりづらい状況があるというが、本校では、通級による指導担当者が週3回の巡回以外は不在にしているというデメリットをほとんど感じなかった。それは、通級による指導の担当者と通常の学級の担任が日頃から児童の実態についての情報を交換している様子が本校には以前から見られたことや、通級による指導担当者の巡回日に通級に関わる会議等を計画し、年間スケジュールに入れたことによるものであると考える。研究を実践していく中で、本校ではあたりまえのように根付いていたことが、通級による指導ではとても重要なことであることを再認識できた。今後は、特別支援教育コーディネーターや、通級による指導担当者が変わっても、山名小スタンダードとしてシステム化し、校内体制を維持できるようにしていきたい。また、連絡票について、研究を始めた当初は、情報交換会をスムーズに進行するための工夫を行っていたが、研究を進めていく中で、連絡票に記載する項目を重点二つまでに絞ることにした。児童の抱える課題と目標や支援内容と連携するように工夫して作成したことで、情報交換会で話し合う内容が焦点化され、質の高い情報交換会が実施できるようになってきたと感じる。

3 今後の課題

情報交換会によって、通常の学級担任や通級による指導担当者が、児童に対してより効果的な手だてを講じたことによる成果は多くあった。研究当初は、通級による指導内容と通常の学級の学習内容とのつながりが十分でなかったために、通級による指導で学んだことを通常の学級での学習や生活に生かす機会が少ない場合があった。通級による指導内容が、通常の学級での授業や生活で、指導の効果を発揮することにつながっていることについて、特別支援教育校内委員会等で確認する必要があると感じた。また、連絡票の作成において、特別支援教育コーディネーターと通級による指導担当者の負担が軽減されるように努めたが、連絡票を作成するまでにかかる時間は少なくない。今後、通級による指導に携わる教師が、連絡票を情報共有のツールとして普段から活用できるように工夫していけば、特別支援教育コーディネーターと通級による指導担当者が負担を感じることなく、より連絡票を有効活用できると考える。そうなれば、持続可能な取組につながるのではないかと考える。

1回の情報交換会に必要な時間についても、通級指導教室の対象児童が増えたことで、児童全員の検討により多くの時間が必要となる。短時間の話し合いの中で、児童にとって効果的な手だてを検討するためには、特別支援学校のセンター的機能を活用しながら、PDCAサイクルを積み重ね、教師の専門性を学校全体で高めていく必要がある。

このように、校内体制を維持しながらよりよい形にしていくことが大切であると考えます。